
絶対零度の異世界譚

リオール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

絶対零度の異世界譚

【Zコード】

Z52920

【作者名】

リオール

【あらすじ】

異能に目覚めた者を兵器として運用する世界。そんな世界のある組織で使われていた異能者レインは、個人で持つべき力を超えたとされ始末されそうになる。

だが、何の因果かレインは死なず異世界へと迷いこんでしまう。剣と魔法が交錯するファンタジーの世界で、絶対零度の女王陛下フロストクイーンと呼ばれたレインはどうやって生きていくのか。

主人公最強の異世界ファンタジーです。作者の妄想が主成分な

で、作中には残酷描写や厨二病的表現が多く織り込まれる予定です。
苦手な方はご注意ください。

第一話 逃亡不能のバイオスファイア・1

『ブリー フィ ングを開始する』

『場所は旧世界連跡地、ニッドライクの郊外。そこで建設途中の新型シェルター・バイオスファイア』

『現在、その施設がネオスの連中に制圧されている』

『問題なのはその施設が既に稼働出来る段階にあるってことだ。そのバイオスファイアはある新エネルギーを使用していて 正直なところ、暴走状態にされて自爆されたらどれだけの被害が起るか予想出来ない。俺はざつと1億はくだらないと思うがね』

『というわけだ。君にはこれからこの施設を制圧して貰おうと思う。やつらも本気だ、ネオスの能力者連中も居るはずだが……やれるだろ? 健闘を祈る』

上空15000フィートの高度を鋼鉄の翼が駆ける。

一度に十数人を收めれそうな輸送機だ。だが今はその中にたつた一人しか乗つていらない。

それは一見しただけでは可憐な少女に見える。

否、どれだけ見つめようともそのイメージは覆らないだろう。まるで人類の叡智をつぎ込んで造られたかのように整った顔。雪のような真っ白な肌に、肌に負けず劣らずの真っ白な長い髪。瞳はまるで氷のように光を反射する蒼。

背は160センチくらいだろうか。

ドレスを着ればダンスパー ティーの主役を張れるだろうその子は、しかしてその身を純白のトレンチコートで包み込んでいる。その両手には武器らしいものを持っていないが まるで、戦地に赴く兵士のように見える。

事実、その通りだつた。

『降下予定ポイントに到着』

コックピットからの通信に、少女は立ち上がる。
後部ハッチがゆっくりと開き、身を突き刺すような冷氣が入り込んでも微動だにしない。

「オープンチャンネル」

少女から短く発せられたその声は、聞く者全てに凍てつくような印象を与える。

『作戦を開始しろ、レイン』

若い男性の声が響いたと同時に、レインと呼ばれた少女はその身を虚空に投げた。

レインはこうして空を落ちるのは嫌いではなかつた。
純粹に綺麗だといふこともあるが、何よりも開放感が良かつた。
今は誰にも縛られていないと、錯覚することが出来る。
心地良さを感じている最中にも、地上は刻々と迫つてくる。
タイミングを見計らつて、レインは能力を行使した。

キシキシと音を立てて空気中の水分が凝固する。

あつという間に、レインの背には巨大な氷の翼が展開されていた。
【零翼】その意思によつて思つがままに動かせる翼は、人には有り得ない自在の飛行を実現する。

レインは豪快に翼を操り、速度を調整する。
新型シェルター・バイオスフィアの中央にレインは音もなく降り立つた。

「……ん？」

異常を感じたのはその直後だつた。

音が無い。

話では能力者を扱うテロ集団ネオスが占拠していたということだったが、レインの体内に備え付けられた生体センサーには何の反応も示さなかつた。

（……ジャミング、もしくはステルスか？ ネオスにそんな技術があるとは思えないが……）

「マスター。何かおかしい……ネオスの連中が見当たらない

通信で繋がつている先にいる自らの所有者にレインは事実を伝える。

しかし、返答は到底理解出来ないものだつた。

『いや、おかしくない

「……は？』

『何もおかしくはない。予定通り、今回のターゲットは到着した』

レインの全身が泡立つ。途轍もなく嫌な予感が身を苛む。と同時に、施設全体が稼働音を響かせる。

新型シェルター・バイオスフィアは、薄い皮膜状のエネルギー体を作り出しそれで全体を覆うタイプのまったく新しいシェルターだ。理論上、核の直撃でも100%揺るがないと言われたそれが、内と外を完全に隔離する。

本来は盾となるそれは今は檻となつてゐる。即ち

『 もはや貴様の役割は終わった。命令だ【そこで、死ね】』

ターゲットはレイン。自分自身なのだと、レインは絶望した。内と外の完全な隔離が完了する。開発途中と言っていたが、それは予想以上の安定を見せていた。実際は既に完成していたのかもしれない。だが、それを気にしている暇がレインには無かつた。

「 よう、お久しぶりじゃねえか……女王陛下あ？」

「 あーあ、陛下は僕一人で殺したかったんだけどなー」

「 愚痴を言つても仕方が無い それにどうせ、貴方には無理です
よ」

「 そりそり…… 4対1でも油断出来ないもの。ねー、絶対零度の女王陛下《フロストクイーン》？」

各組織が保有する、最強の戦力がレインの前に立ちはだかる。

「 『 さあ、処刑の時間だ女王陛下……』」

4つの刺客^{ギロチン}がそれぞれの意思を持つて、女王^{レイン}へと襲いかかつた。

第一話 逃亡不能のバイオスファイア・2

「オラアツー！」

最初に動いたのは赤髪の男。
物を遠くへ飛ばすように思い切り振りかぶった腕を動かす。
その軌跡をなぞるように5つの火球が遅れて発射される。
赤髪の男の力は爆炎を操る能力だ。生糸の戦闘狂で『葬炎』とい
う異名で呼ばれている。

爆音と共に吹き荒れる炎。連鎖するように響いたそれはレインの
いた辺りで炸裂した。

それと同時に赤髪を残して他の3人は散開する。
彼らは微塵も油断していない。相手がそれほどの化物だと自覚し
ているからだ。

その証拠にレインはその全てを防ぎきっている。

【零壁】レインは超低温で周囲の水分を凝固させそれを壁として
防御していた。

だが、その壁の向こうに既にその姿はない。

「魔笛！」

「承知していますよ 鋼魔も合わせて下さい」

「はあい」

葬炎の呼びかけに静かに応えた銀髪の優男は周囲から『魔笛』と
呼ばれる探知能力者だ。

次いで返事をしたのは黒髪の女性。彼女は『鋼魔』と呼ばれ鋼鉄
を操る能力を持っている。

魔笛は懐からフルートのような物を取り出すと、綺麗な音色を響かせる。

淀みなく周囲を響き渡るそれは、物体に接触した瞬間に歪な音色に変わる。

ガラスをひつかくような音が周囲から響く中、何も無いはずの上空から歪な音色が響いた。

氷を見に纏い、光を乱反射させることで擬似的な迷彩を得ていた女王の位置が割れる。

「そこだあ！」「そこね」

宙を駆けたのは矢尻がついた黒鉄の鎖と巨大な球体の爆炎。何も無いはずの空間をまず鎖が貫く。とっさに身を逸らしたレンだつたが零翼の片方を貫かれた。

そのまま逃がさないように鎖が翼をがんじがらめにする。

次いで迫る爆炎をレインは回避する術を持たなかつた。

とつさに零壁を造り出して防御する。それと同時に翼の凝固を解除した。

「さやつ！？」

あまりにも早いその判断に対応しきれなかつた鋼魔が体のバランスを崩す。

レインはそのまま防御した爆炎の勢いを利用して葬炎らと距離を取つた。

幸いスフィア内には剥き出しの鉄骨などの障害物には困らなかつた。

その一つに背を預けたレインは自身の右腕を見る。

身に纏っていたトレーンチコートは耐熱、耐刃、耐衝撃などの様な攻撃を想定した代物だが、それが真つ黒に炭化している。勿論、

中の右腕も無事ではない。

「IJの義体……思った以上に使いづらくな

だが、レインはまるで痛みを感じていないかのように独りしゃぶる。事実、本来なら感じるはずの痛みをレインには殆ど感じなかつた。

兵器として運用される異能者の体は普通の人間の物ではない。最先端のナノマシンを体内に飼う有機的人工義体だ。

それはいくらでも変えの効く体であり、脳さえ無事ならどれだけ傷つこうとも問題ない。

ナノマシンはセンサー やレーダーの役割を果たすことも出来る。異能者の体を義体に置き換えるには3つの目的があつた。

『身体能力の向上』『身体耐久度の向上』そして『異能者の支配』の3つだ。

『身体能力の向上』はそのままの意味だ。筋力や体力などを増強する。

『身体耐久度の向上』は義体としての耐久度だ。異能者は能力の成長につれて人の身では耐え切れないほどの力を發揮出来るようになる者もいる。その運用に耐えるため、全身を義体にする必要があるのだ。

『異能者の支配』は義体にする際に施される洗脳のようなもので、これを用いて各組織は異能者を扱う。主人として登録された者の命令は絶対服従だ。マスターが「死ね」と言えば絶対に死ななければならぬほど強制力を持つ。

良質な義体は、増強の度合いが大きく耐久度が高い。それだけで強く、長持ちする兵器が造れる。

と言つても義体が限界に近づけばまた新しい義体に移し替えればいいだけなので、普通は耐久度を気にする必要は無い。

だが、レインだけは違った。

つい先日、能力の成長を経たレインは既に数回の能力行使で義体が崩壊するレベルにまでなっている。

故に特注したのが現在の義体だつた。

身体能力向上を一切しない特殊な義体。その代わり耐久度がずば抜けて高い。さらには新エネルギーを使用した『ある機能』を持たせられているとレインは伝えられていた。

「……おお、すごい。治つた」

炭化もしくは重傷の火傷を負ったはずの右腕が綺麗さっぱり治つていた。

『ある機能』とは、すなわち再生能力。

普通の義体が持つ数十倍のそれを、新エネルギーで編み出しているらしい。

新エネルギーが一体何なのか、専属の義体技師に聞いてみたが國家機密と言っていた。

「休憩終了のお知らせ」

「つーーー！」

突如として背後についた障害物からナイフが生え、レインへと襲いかかる。

レインはそれを前に跳んでして躲した。

「んつふつふう。びっくりした？ びっくりした？」

障害物をぬるりとすり抜けて現れたのは金髪の少年。『死神』の異名で呼ばれる物質透過能力を持つた異能者だ。

瞳を爛々と輝かせて問いかける『死神』にレインは凍てついた視

線を投げる。

「全然ダメ。声かけて奇襲とかバカか?」

「しょんぼり……でもさ、直ぐに終わっちゃつたらつまんないでしょ?」

何時の間にか接近していた他の3人も、それはそうだと言わんばかりに笑う。

レインはそれを、愚かしいと冷笑した。

「クズが」

たつた一言でその場の空気が変わる。

襲撃者全員の中に渦巻くのはこれまでに受けた屈辱に対する怒り。それと同時に感じたのは 底知れない恐怖。

「ここでオレは死ぬよだから……折角だし一矢くらい報いさせてやるつ、なーんて思つたがやめだ、やめ。お前らじや一生続けてもオレには勝てん」

「はつ……何を訳 言つ……」

異変に気づいたのは4人同時。だが、それはもはや手遅れとなつたときだった。

義体が思い通りに動かない。能力が使えない。

手足も、頭も、唇も、鼻も、凍つたように動かない。何故か目だけが動く。

さらに異変は周囲へと影響を及ぼす。バイオスフィア内の至るところが音を立てて氷結を始めていた。

「何が起こうとしているか理解出来んだろう?」

目だけを一生懸命にギョロギョロと動かす4人を眺めながらレインは冷笑する。

「絶対零度といえど凍らない物は山ほどある。そう、例えば 電気。何故ならこれは現象だからだ。物理的に凍るはずがない」

やがて、周囲の凍結が4人の体にも及んでいく。

本来ならこの時点ではナノマシンが作動するはずなのだが、その気配はない。

「だがもし、凍らせることが出来たなら 現象を凍てつかせることが出来たならば。電気信号無しで動くことの出来ない人間、もしくは義体に……負けるはずがない! フフ、フフフ アハハハハハハ!!」

哄笑が凍てつく世界に響き渡る。

脳だけがその氷結を逃れている中、4人全員はかつて無いほどに後悔し絶望していた。

「これがオレの力。『絶対零度の女王』だ」

アブソリュート・スタイル

もはやその声を聞く者は居ない。凍てついた檻の中で、レインはただ一人立っていた。

「はあ……虚しい」

しんしんと真っ白な雪の降り始めた中、レインはごろりと寝転がる。

セイでやつやくレインは異常に気づいた。

バイオスフィアが暴走状態になつてゐる。

内部で派手にやりすぎたからか。はたまた暴走するよつて細工を
れていたか。

レインにはどちらでも良かった。既にマスターから死を命じられ
ていたレインには、自殺だろうと他殺だろうと死ねば問題無い。
他組織の異能者を刺客としたのは戦力を削ぐためだつ。だから
マスターは『セイで、死ね』としか命じなかつたのだとレインは考
えていた。

雪の白よりも、もっと白に輝きが増すのをレインはまつと見て
いるだけだ。

「オレ一人には過ぎた墓標か……」

レインは考える。暴走したらどれだけの被害が出るのだろうか。
自分なら、それを止めることが出来る。現象すら停止させる絶対零
度なら、今すぐ!。

「やる気なんて無いナビ」

輝きが視界を埋め尽くす。自分の体を白が塗り潰す瞬間、レイン
の口から言葉が溢れる。

それは、何処か悲しげな笑みと共に、無くなつた空間に響
いた。

「ハハツ……来世じや、普通がいいな」

その言葉を遺言に、輝きが全てを塗り潰す。

そして、絶対零度の女王陛下と呼ばれた兵器、凍堂零雨はこの世界から消滅した。

第二話 白銀異境のプロローグ

「うひひやー！ すうじうすよ、これ全部本物です！ 雪ですよ雪
つ！ 僕初めて見ました！」

「ちいと落ち着けやロロア……気持ちは分からんでもないがな」

幌馬車から顔を出して身を乗り出す青年 ロロアは本来見れる
はずのない光景に年甲斐もなくはしゃいでいた。

辺り一面は雪で出来た白銀の世界。本来は緑豊かな森だったそこ
は、突如として現れたこの異常な世界に塗り潰されていた。
原因是不明。3日ほど前に近隣の村から首都へ報告があり、急遽
調査隊が結成された。

だが、ここにいる彼らは調査隊ではなかつた。

「ガイノの言つとおりだ。もしかしたら魔族の侵攻かもしれない。
……まったく、姫様には困つたものだよ」

リーダー格らしき女性が声を上げる。幌馬車に乗つてているのは御
者を除けば彼女を含め3人だ。

彼らは王族親衛隊の3人。ここにいるのは忠誠を誓つた姫君が發
した言葉に起因する。

『へえ……あんなところに雪が降つたの？ ジヤあ……行つて調べ
てきなさい。何か面白そつな物があつたら持つてきてね？』

という軽いノリのものだつた。

金髪ショートヘアの女性 コリアはこの気まぐれに言いようも
ない頭痛を覚えていた。

それを見たガタイの良い男 ガイノと呼ばれた彼は豪快な笑み

を浮かべて言ひ。

「なあに、大したこと無いだろ？見る限りただ寒いだけだ」「現れた当初はかなりの冷氣を発していたらしいけどね……それこそ、魔物が息絶えるほど」

確かにその通りだつた。

最初の頃は、近隣の村へも身を刺すような冷氣が及んでいたのだ。幸いにして犠牲者は無し。家畜に幾分かの被害が出たのみに収まつた。

この辺りの雪をどければ、それこそ至る所に魔物の凍りついた死骸が見つかるだらうとコリアは考へる。

「ロロア、そういうやお前調査隊の連中と何か話してたじゃねえか……何か見つかつたとか言つてたか？」

「作成された周辺の地図を貰つたんですよ。やつやつ、この異常気象つて中心があるらしこうすよ」

「ほう？」「なんだと？」

ガイノとコリアの一人はロロアが懐から取り出した地図を額をくつつけるようにして見る。

そこには森の大まかな範囲と、ポイントごとの状況が細かに書き込んではつた。

「（）から（）まで円を描くよつた範囲ではまだ雪が降つてゐるそうですよ。調査隊は雪が收まつてから調査に入るつて言つてました

何が起つてゐるかわかつませんからね」

「よし、中心に行くぞ」

「ええ！？」

コリアの言葉に驚いたのはロロアだけだった。ガイノは当然といつたように頷いている。

「隊長……何かいるかもしないんですよ？」

「スノウドラゴンでも居れば近隣に被害が及ぶのは必至だろう。それなら、私たちが先に踏み込んでいたほうがましだろう？ それに、何も居なければ堂々と大手を振って帰れるし」

「まあ……そうですね。何も居ないことを祈りますけど」

「んな心配すんな。いやしねえよ……ただの異常気象だ」

コリアは馬を操る御者に目的地を伝え、そこに行くよろづ指示した。

「うお、本当だ……雪降つてら……」

「確かに、こいつあすげえ」

「うむ……なかなか綺麗だな」

彼らは三者三様の様子で歩く。ガチャガチャと、歩くたびに鎧が音を立てるがその音すらも白銀の世界に飲み込まれていくような錯覚を与える。

彼らは不足の事態に対応できるよつ馬車から降り徒步で移動していた。

異常気象の中心らしき場所まで一行はそう時間もかからず辿り着いた。

田の前に広がった景色に3人はほうとため息をつく。

決して広いとは言えないその空間は、それだけで一種の芸術にも見える。

氷だ。木々の葉の一つ一つまで氷で出来ている。

もとは緑豊かな泉だったであろうその場所は、たった3日で白銀の異境と化していた。

そこは他に比べて異常なほどに冷氣に満ちていた。

耐寒防護の魔法具を身につけていなければ、体の端から凍りついていたかもしないと彼らは身震いした。

未だにしんしんと雪が降る中、『それ』に初めて気がついたのはロロアだった。

「た……隊長。俺、夢……見てるんですかね」

「……何を言つてゐる?」

「どうしたロロア。寒さで頭イッたか?」

「あれ……」

そう言つてロロアの指差した先、初めは何も変わらない光景だと思えたそこに、『それ』は在った。

「もしかして 女の子じゃないですか?」

半ば雪に埋もれるよつにしてあつた『それ』はまるで人形のよつだつた。

本物の雪と変わらないほどに白く美しい髪と肌。

こととん美を追求したかのような造形の顔。

唯一違和感があるとすれば、それは兵士が着るよつなコートを身につけていることだけだろうか。

「お、おこつ……」

真っ先に駆け出したのはユリアだつた。

雪に埋もれた人形のような少女を優しく抱き起こす。

ユリアはその異常なほど冷えた体を検分する。

心音は弱々しくも動いているようだ。だが、やはりといふか目覚める気配はない。

「隊長……」

「心配するな、生きている……ロロア、お前は先に戻つて調査隊に連絡だ。ガイノ、この子を頼む。一刻も早くこの森から連れ出して温かいところへ。私はこの子の手がかりがないか辺りを調べてから戻る」

「「「了解！」」」

こうして、姫の気まぐれによるこの調査は思わぬ拾い物をすることになった。

この後、彼らは一向に田覓める気配の無い少女を連れて首都へと戻る。

その少女こそが後に、歴史を語る際には欠かせない役者になると知らずに。

絶対零度の異世界譚が、今 幕を開けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5292o/>

絶対零度の異世界譚

2010年10月28日01時07分発行